

「離島実習後報告レポート」

今回の実習は沖永良部の大蔵医院を見学させて頂いた。沖永良部へは鹿児島から船で約 18 時間、飛行機で約 80 分かかる場所にある。大蔵医院は沖永良部知名町にあり、医師 2 人、看護師 7 人、栄養士 1 人、事務 4 人、給食 3 人のスタッフがいらっしやった。沖永良部での実習中台風が接近し、心配される日もあったが天候に恵まれ無事に 4 泊 5 日の実習を終えることが出来た。

実習内容は主に外来の見学と訪問診療、介護老人施設の見学であった。外来見学では、貧血や肺炎、熱、心臓病など様々な症状の患者さんが来院しており、年齢層は厚かった。先生曰く、鹿児島や本土では冬に体調を崩す人が多いが、沖永良部では冬に比べ夏の方が体調を崩して病院に来る人が多い。夏の暑い中クーラーをつけなかったり、外で仕事を頑張りが過ぎてしまうことが原因らしい。また、沖永良部はサトウキビやジャガイモを多く生産している農家が多く、それらの値段が下がった時は病院に来る患者さんが減るといふ。これらのことから、患者さんの病気のことだけを把握するのではなく、島の環境や経済、患者さんの生活背景など様々なことを理解する必要があるのだと感じた。外来見学中に、心電図のエコーや内視鏡、カルテ作りを体験させて頂いた。エコーや内視鏡は機械自体初めてで検査の様子も初めての見学だった。解剖で体の臓器の位置や大きさは理解していたため、エコーや内視鏡から自分で少しは読み取れるのがとても嬉しく感じた。カルテ作りは入院患者さんから直接お話を聴き、主訴や既往歴、家族歴、患者背景、現病歴などを記録した。必要な情報を限られた時間で聴いてまとめることが、こんなにも難しいとは思わなかった。

訪問診療は 1 軒のみであった。沖永良部では在宅医療を望む患者さんは年々減少しており、病院に入院するか介護施設に入る方が多いのだという。

見学させて頂いた花の家は、小規模多機能型居宅介護事業所で通いを中心に泊まりや訪問を柔軟に利用できる施設である。通われている方ほとんどが 95 歳以上でとても元気で沢山お話をした。介護している方や介護されている方の様子を見ていたらとても居心地がよさそうで、私も将来ここに通いたいと感じた。

今回の実習を通して、自分の知識不足と視野の狭さを身に染みて感じた。まだまだ学ぶことは多くあり、医学だけでなく色んな方面のことも学んでいきたい。

俳句

はなしゃぬを 想い守る背 仰ぎ見る

はなしゃぬとは沖永良部での方言で大切な人という意味で、大蔵先生を始め他の先生方が大切な沖永良部の人達のことを思って頑張られている姿を私たちや次の世代の人が見ている様子を詠みました。

離島実習を終えて

今回、離島実習で沖永良部島の大蔵医院で実習をさせていただいた。沖永良部島は知名町と和泊町の二つ合わせて人口約1万5千人、島の周囲は約60キロの島で、本土からはかなり遠く、船で約17時間半、飛行機で1時間かかった。大蔵医院は院長の大蔵英世先生と、息子の大蔵聡先生の親子二代でやられている。診療科は内科、胃腸科、循環器科、小児科となっているが、幅広く多くの病気を診療されている。初日に、大蔵聡先生に話を伺ったときに、大蔵医院で一番大事にしていることは「大蔵医院で診療したひとからがんなどの大きな病気が出ないように、早期発見できるような診療をすること」といふうにおっしゃっていた。理由をたずねると、「島の人々はいいい意味でも悪い意味でも世間が狭く、すぐ情報が伝わってしまうから」とおっしゃっていて、とても納得した。島の診療に来られる患者さんで多かったのは、畑仕事による膝や肩の痛みであった。先生に聞くところによると、離島でおおい病気が白内障などの目の病気であるという。様々な症例をみて離島医療の現状を知り、先生方の話を聞いているうちに、入学時より離島医療にたいして具体的なイメージを持つことができたので、将来働く離島へき地のことをほとんど知らなかった入学時よりは成長したことを少し実感できた。

また、今回の離島実習では診療の見学だけでなく、大蔵医院と連携している小規模多機能型居宅介護施設である「花の家」での実習もさせていただいた。花の家では、入居できる人数がきまっていて、毎日いろいろな人がくる。この施設ができたときは、みんな知らない人ばかりで戸惑う人が多かったが、現在ではみんな見慣れた顔でお互いに笑いあえる関係ができていて、将来ここに入って老後を過ごしたいくらいとてもいい環境だなと思った。花の家でおばあちゃんの生まれたときの話や育った場所の話をきいていると、沖永良部の方々は、ほとんどが沖永良部で生まれ、東京や大阪などの沖永良部でないところで育ち、老後を沖永良部で過ごす方が多いことに気づいた。島の方々は皆さんとてもいい方ばかりだと感じていたが、沖永良部に帰ってくる人が多いということを聞いてからは、それだけ沖永良部はいい島なのだなどと改めておもった。

今回の実習のなかで最も勉強になったと思ったのは、先生に教わりながら診断のカルテを書いたことであった。家族背景や症状などの様々な情報をつなぎ合わせ、病気を絞り込む先生の姿に圧巻された。将来しっかり身につけ、先生のようになりたいなと思った。

これから医療を学ぶなかで、将来働く場所の具体的なイメージを前もって持つておくことは大きな意味を持つと思うし、今回の実習がこれからの学習のヒントになることは必ずあると思うので、今回の実習はとてもためになったと思う。これからも、学んだことを糧に医療を学んでいきたいと思う。

俳句 あぐんきゃの笑顔を守る地域の輪

あぐんきゃは友達という意味ですが、ここでは島の人という意味で使いました。沖永良部は皆さんいい人に感じましたし、そのおかげか島に医師として戻ってくる人も多いというのを先生から聞きました。それだけ地域の輪が強いのだと思い、そのおかげでみんなが健康で笑顔で過ごせる地域が作れていると思うとおもいこの詩を読みました。